

IATSS三十周年によせて

IATSSと私

高田邦道 日本大学理工学部教授

大分県出身。日本大学理工学部交通工学科卒業。現在同大学理工学部学部長、社会交通工学科教授。著書は『交通調査マニュアル』『CO2と交通』ほか多数。現在は「交通技術を交通政策の展開に生かし、より安全、快適、健康な社会システムをどう構築すればよいか」に取り組んでいる。



IATSSとの最初の関わりは、設立当初実施されていた研究助成を昭和54年に戴いた時である。この時の「既成市街地における交通運用に関する基礎的研究」は、地区交通管理計画と住民参加に関することであった。この研究が現在のIATSSで進めている「交通事故半減プロジェクト」の礎となっている。この研究助成でまとめた結果を具体化するのに約四分の一世紀を費やした。

IATSSと最も大きな関わりができたのは第9回の国際交通安全学会賞論文部門での受賞である。他の学協会では認められなかった交通政策システムの論文を採択していただいたうえに論文賞まで戴いた。現在では、政策科学なる分野もでき、同系統の論文も増えている。文・理系混在の当学会の会員の先見性で見出していただいたと深謝している次第である。

その後、会員に推挙していただき、褒賞、編集の委員、国際交流、シンポジウムの委員長を務めた。これまで交流の少なかった作家、法・経・文学、医学、農学、機械電気・情報系の先生方との仕事ができ、その後の研究活動で視点と発想に大きな影響を与えていただいた。褒賞委員会、高名な先生方と大雪の北海道から日本の色といわれる秋の東北まで四国、中国、九州、近畿とめぐることができ、もの見方を教わった。学会誌編集委員会では、杉山・武内委員長の下で文・理系の違いを越えて論文の有り様を議論できた。

国際交流委員会では、夏の暑い中、今は亡き木村敦常務理事に研究室までお越しいただき、口説かれて引き受けるはめになった。IATSS創設当初活発であった、この委員会が当時停滞していたのでなんとか復活させろというわけである。当時研究室というこつぽ状態であった交通関連の留学生をIATSSの場に引き出して学生のネットワークづくりと日本の生産技術の現場を知ってもらおうということで、見学会＋懇親会＋研究発表会＋各国の交通事情の紹介をベースにしたISSOTを立ち上げた。私の後を引き継いでいただいた委員長と事務局の努力のおかげで、現在は国内と国外でそれぞれ隔年に開催されている。それも学生の自主活動として実施されるといった発展をみせていることは嬉しい限りである。シンポジウム委員会では、20世紀から21世紀に変わる時期に、『車社会はどう変わるか』という共通テーマで、ITS、環境、都市文化をとり上げ、東京、鎌倉、京都で著名人を招いてシンポジウムを3回開催し、その成果を文芸社から出版した。

平成13年に顧問になったが、今日まで引続き研究プロジェクトで活動させていただいている。この間、TDM(交通需要マネジメント)の一手段であるフレックスタイムの日本型を考えるプロジェクトを立ち上げ、フレックス週休2日制を提案し、その成果を練り上げて当時社会人大学院生として勉強していた企業の社長さんとまとめた論文が第17回の論文賞の受賞となった。

以上がIATSSと私との関わりである。こうしてまとめてみると、会員になる以前から今日までIATSSと歩いた時間は長く、IATSSに育てていただいたといっても過言ではなく、深く感謝している。国際問題、環境問題、さらに安全問題を抱える現代社会では、当学会の役割はますます大きくなると考えられる。選ばれた会員としての先生方が力を発揮できる学会運営をしていただき、さらなる発展に寄与していただくことを切に希望する次第である。